

「からし種の信仰」

ルカの福音書 17:1~6

はじめに

今日の箇所は非常に難しい箇所です。何が難しいかといいますと、神のご計画である御国の福音として受け取ることが難しく、「神の国」を求めさせることすなわち主イエシュアの再臨を待ち望ませるメッセージとして理解することが難しい箇所なのです。そして今日の内容もまた有名で、ここから語られてきた教えはすべて私たちの信仰生活と呼ばれる日常に、私たち自身に当てはめるものでした。このほぼ固定化された偏見、先入観、既成概念を覆すことは容易ではありません。きっと「難しい、わからない」などと言って受け取られない方々もおられると思いますが、主が今日この箇所から私に語るようにと与えてくださったものを分かち合いたいと思います。

1. つまずき

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:1 イエスは弟子たちに言われた。「つまずきが起ころのは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわいです。

17:2 その者にとっては、これらの小さい者たちの一人をつまずかせるより、ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがましです。

「つまずきをもたらす者はわざわい」というこのたとえは多くの場合、信者同士の関わりについての教えの中で用いられています。それはクリスチャンとして誰からも非難されることのない模範的な正しい言動、生き方を心がけなさいというようなものとなりますが、そのような教えは極めて表面的なもので、神のご計画を直接的、具体的に指し示すものではありません。重要な事実、奥義は常に秘められ、隠されているのです。今日もそれを解き明かしてまいりましょう。まずこのたとえの焦点となっている「つまずき」という言葉について考えます。これを即自分の人間関係に当てはめてしまう衝動をぐっとこらえて、偏見、先入観、既成概念にふたをした状態で聞いてください（難しいですけど）。これを原語であるヘブル語でカーシャル(לִשְׂרָר)といいます。そしてこの言葉の初穂、すなわち第一情報である、聖書で初めてカーシャルが使われた初出箇所にも「ただ一つのこと」に目をとめ、それが本来指し示しているものを思いめぐらしてみましょう。聖書箇所はレビ記 26:37 です。

レビ記【新改訳 2017】

26:27 これにもかかわらず、なおもあなたがたが、わたしに聞こうとせず、わたしに逆らって歩むなら、

26:28 わたしは激怒をもってあなたがたに逆らって歩み、あなたがたの罪に対して七倍重くあなたがたを懲らしめる…。

26:37 追いかける者もないのに、剣から逃れるかのように折り重なってつまずき倒れる。あなたがたは敵の前に立つこともできない。

これは主がシナイ山でモーセを通してご自分とイスラエルの子らとの間に立てられた掟と定めとおしえの一部です。ここに聖書で最初のカーシャル「つまずき」があり、それは「追いかける者もないのに…つまずき倒れる」とあり、つまり誰かにつまずかせられるのではなく、自分で自分をつまずかせるという意味の言葉であり、それはイスラエルが主に「逆らって歩む」ことによってもたらされる報い、自らの罪の結果を指し、この事実を聖書の中で解釈する、つまり聖書を聖書で解くならばそれは具体的に「バビロン捕囚」と呼ばれるイスラエルの歴史の中で起こった世界離散の事実を指し示しているのです。そしてイエシュアはこの過去の事実を「型」として、終わりの日にもまた同様の出来事が起こることを示唆しているのです。それは「七倍重くあなたがたを懲らしめる」と表現されている、世の終わりの七年間の患難時代を指しています。これは神のご計画ですのでまさに「つまずきが起こるのは避けられません」とあるようにやがて必ず来る、起こるものです。この奥義を知った上で次のたとえに入りましょう。

「ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがまし」というこのたとえは「…投げ込まれるほうがまし」とあるように、つまずかせることよりも良い、正しいという意味のたとえであることをまず覚えてください。そして「ひき臼」ペラハ・レヴ(פֶּלֶחֶרֶב)の初出は以下の出来事です。

士師記【新改訳 2017】

9:52 アビメレクはやぐらのところまで来て、これを攻め、やぐらの入り口に近づいて、これを火で焼こうとした。

9:53 そのとき、一人の女がアビメレクの頭にひき臼の上石を投げつけて、彼の頭蓋骨を砕いた。

9:54 アビメレクは急いで、道具持ちの若者を呼んで言った。「おまえの剣を抜いて、私にとどめを刺せ。女が殺したのだと私について人が言わないように。」若者が彼を刺したので、彼は死んだ。

士師記に登場するこのアビメレクは、士師ギデオンの息子の一人でしたが、他の兄弟たちを殺し、バアルの神殿から取り出した金で粗暴なならず者たちを雇い、イスラエルを三年間支配した悪王です。しかし「一人の女がアビメレクの頭にひき臼の上石を投げつけ…頭蓋骨を砕いた」結果、彼は死にました。この出来事もまた終わりの日に起こる神のご計画の「型」です。すなわち終わりの日に現れる悪魔の子、獣と呼ばれる反キリストが、地上再臨されるメシア、イエシュアによって滅ぼされることが指し示されているのです。つまりこの「ひき臼」とはイエシュアご自身を指しています。そしてそのひき臼が結びつけられる「首」ツァツヴァール(צַוּאָר)とはヤコブすなわちイスラエルを指しています。

創世記【新改訳 2017】

27:15 それからリベカは、家の中で自分の手もとにあった、上の息子エサウの衣を取って来て、それを下の息子ヤコブに着せ、

27:16 また、子やぎの毛皮を、彼の両腕と、首の滑らかなところに巻き付けた。

27:27 …イサクはヤコブの衣の香りを嗅ぎ、彼を祝福して言った。「ああ、わが子の香り。主が祝福された野の香りのようだ。

27:28 神がおまえに天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるように。

27:29 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

これはイサクが息子のヤコブを祝福する場面です。ヤコブは「首」に子やぎの毛皮を巻き付けられることでイサクの長子の祝福、主がアブラハムと交わされた契約、約束（創 12:2~3）を得ました。このようにツァツヴァールは神の選びの民であるイスラエルを指し、そして「ひき臼を首に結び付けられ」るとは、イエシュアとイスラエルが結ばれること、つまりユダヤ人とも呼ばれる彼らがイエシュアをメシアとして信じ受け入れるようになることを表しているのです。それはまさにこの時のヤコブのように、自らの知恵と力で画策したものではなく、すべて彼の母「リベカ」が命じ、また与えたことによってなされたように、イスラエルの残りの者もまた「恵みと嘆願の霊を注ぐ」という主からの一方的な働きかけによって起こされる者たちです。こう預言されています。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

2:8 その日、主はエルサレムの住民をかくまう。その日、彼らの中のよろめき倒れる者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになって、彼らの先頭に立つ主の使いのようになる。

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

しかしそのようなイスラエルが「激しく泣く」とあり、それがイエシュアが「海に投げ込まれる」とたとえられたことに結びつきます。これもまた終わり日の「型」なのです。黙示録の獣、反キリストが現れ、世界を支配することになる七年の患難時代、その後半の三年半は「世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決していないような大きな苦難（マタイ 24:21）と呼ばれ、この中をイスラエルは通らなければならないのです。それはまさに荒れ狂う嵐の海に人を投げ込むようなものです。しかしイエシュアをメシアとして信じるユダヤ人たちは「イスラエルの残りの者」または「神の印を押された 144,000 人のイスラエル」と呼ばれ、この大きな患難にあっても守られ、生き残ります。そして再臨されるイエシュアによって獣は滅ぼされ、イスラエルの残りの者はエルサレムに帰り「神の国」に迎えられます。ですからイエシュアは「ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがましです」これで良い、これで正しい、このようになる、とたとえをもって神のご計画を、その完成である「神の国」について説かれたのです。ですからこのたとえは決して私たちの今の人間関係、生き方について教えたものではないということを覚えてください。

2. 七回赦しなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:3 あなたがたは、自分自身に気をつけなさい。兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい。そして悔い改めるなら、赦しなさい。

17:4 一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回あなたのところに来て『悔い改めます』と言うなら、赦しなさい。」

このたとえ、教えもまた人間関係について説いたものではありません。もちろんこれを行わなくても良いと言っているわけではありません。ぜひ実践してください。しかしなぜそれを行うのかという理由、意味が重要なのです。この「七回（悔い改める）…なら、赦しなさい」とは、先ほどのたとえを解き明かしたような形で、世の終わりの七年間の患難時代を通してイスラエルは主に立ち返り、救われることすなわち「神の国」に入るというご計画が秘められたものだから、そのような神のご計画がやがて必ず成就するのだということをおなた自身が覚えるため、またその解き明かしを宣べ伝えるためにこれらの教えを実践していただきたいのです。私たちクリスチャンはよく「そういうことをしたら証しになる（あるいはならない）から」と言って自分や相手を戒めたり矯正したりしますが、私たちは一体何を証ししているのでしょうか、何を証しすべきなのでしょう。真実を言いますが、私たちが証しすべきものは、ただ神のご計画の完成である「神の国」についてのみです。決してあなたが立派で優れた人になって賞賛を受けることはありません。それは主がほめたたえられることにはならず、ただあなただけがほめたたえられるだけです。どうかただ「神の国」を宣べ伝え、それが成就する日、全地で主の御名だけがほめたたえられるようになる日を、あなたの言動によって証しし、そして聖書を用いて証ししてください。くれぐれもお願いします。

3. からし種の信仰

ルカの福音書【新改訳 2017】

17:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増し加えてください。」

17:6 すると主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この桑の木に『根元から抜かれて、海の中に植われ』と言うなら、あなたがたに従います。」

残念ですがこのたとえはあなたの願いを叶える、不可能を可能に変える信仰を教えたものではありません。もちろんその願いが主の御心にかなったものならそれはなるでしょう。しかしそのような解釈ではここでイエシュアがたとえておられる、なぜ「からし種ほどの信仰」またなぜ「桑の木に『根元から抜かれて、海の中に植われ』」とたとえられたのか、ということに込められた、秘められた意味がまったくなおざりにされ、そればかりかここまでの文脈がまったく無視されることにもなります。先ほどイエシュアが「海に投げ込まれるほうがまし」とたとえられたその結末を覚えておられるなら、この「海の中に植われ」というたとえが同じ結末、同じ意味を別なものにたとえて、同じ内容のメッセージ繰り返して強調して語られていることがわかるはずです。

では実際に見てみましょう。まず「からし種」について「からし」は現代ヘブル語ではハルダール(לְחֵלְדַל)というそうですが、実は旧約聖書にはない言葉です。しかし「種」と訳されているガルガル(גַּרְגָּר)は以下の預言にわずか一箇所のみ、まさに小さな種のような形で使われています。

イザヤ書【新改訳 2017】

17:4 その日、ヤコブの栄光は衰え、その肥えた肉は痩せ細る。

17:5 刈り入れ人が立ち穂を集めて、その腕に穂を刈り入れるときのようになる。レファイムの谷で落ち穂を拾うときのように。

17:6 オリーブを打ち落とすときのように、取り残しの実が中に残される。こずえには二つ三つの熟れた実が、実りの多い枝には四つ五つが残される。——イスラエルの神、主のことば。」

17:7 その日、人は自分を造った方に目を留め、その目はイスラエルの聖なる方を見る。

17:8 自分の手で造った祭壇に目を留めず、自分の指で造った物、アシェラ像や香の台は見ない。

この預言もまた終わりの日を指しています。「その日、ヤコブの栄光は衰え…」とあるようにイスラエルを大きな患難が襲います。しかし「取り残しの実が中に残される」とあり、ここにもやはりイスラエルの残りの者の存在が指し示されており、そこに「実」と訳されたガルガルがあります。そして彼らは「自分を造った方…イスラエルの聖なる方を見る」とあり、再臨のイエシュアが指し示されています。このように、からし「種」の信仰とは漠然とした様々なことに向けられ適用される小さな信仰のことではなく、上記に預言されたイスラエルの残りの者が再臨のイエシュアを見る「その日」が来るといふ預言、神のご計画を覚える、信じて待ち望む信仰のことなのです。イスラエルの残りの者はそのような信仰を持ちつつ「海の中に」すなわち大きな患難の中を通らされるということがここにはたとえられているのです。ちなみに「桑の木」と訳されているシクマー(שִׁקְמָה)は以下にその初出があり

I 列王記【新改訳 2017】

10:27 王はエルサレムで銀を石のように用い、杉の木をシェフェラのいちじく桑の木のように大量に用いた。

とあり、エルサレムの神殿の建材となった杉の木を指し示し、エルサレムに植えられた、住んでいた祭司たち、まさに神殿を建て上げ、仕える者たちをたとえたものがこの「桑の木」であると言えます。これがやがて「根元から抜かれて、海の中に」つまりエルサレムから、神殿から追い出されるということが自らを神とする獣、反キリストが神殿に立つ時に成就するのです。このように、先ほどのひき臼のたとえも、このからし種、桑の木のたとえも同じ終わりの日の大患難とその中で起こされるイスラエルの残りの者についての神のご計画を指し示したものであるということをぜひ覚えてください。

そしてこのたとえは弟子たちが「信仰を増し加えてください」と言ったことがきっかけとなり語られたものですが、ここで「増し加える」という意味で使われているヤーサフ(יָסַף)は本来、アダムの妻エバがカインを産み「また」再び産むという意味の言葉です(創 4:2)。つまりそれは今まで持っていた信仰を大きくすることではなく、それとは異なる別の信仰を得ることを求めるものであり、それはすなわちこれまで

の自分に当てはめる人間的な教えに基づく信仰ではなく、神のご計画に目をとめ「神の国」を待ち望む信仰を求める祈りです。弟子たちのこの願いはそれを預言的に指し示しているのです。終わりの日、大患難の中でイスラエルの残りの者にこの信仰「神の国」を待ち望む信仰、再臨の主イエシュアを求める信仰が与えられます。しかし今、こうして私たち教会にも同じ信仰が提示されているのですから、私たちはこれを求め、そして受け取るべきではないでしょうか。